
デバイスと宝貝（パオペエ）と自分探し

あじゃじゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デバイスと宝貝パオベエと自分探し

【Nコード】

N7681Y

【作者名】

あじゃじゃ

【あらすじ】

死んでしまったときに魂の片割れを別世界に落としてしまった主人公は星の太母マザーの力により仮の肉体とスーパー宝貝（贗物）をもらい別世界へと仮転生することになった、という話。 クロス物ではありません。 封神演義の一部設定を使用しております。 原作（リリカルなのは又は封神演義「漫画版」）を見ていないと分からない部分もあります。

仮転生（前書き）

本編とはまったく関係ない話だけど、姐己ちゃんもいいと思うけどやっぱり竜吉公主様が一番だよ。元始砲撃つときのポニーテールとか最高にかわいい。

小さい「ん」がないのでカタカナの「ン」を使用。

仮転生

「と、いうわけですね。今日あなたは死んじゃったのよん？」

どういいうわけかはさっぱりだが、俺は死んでしまったらしい。

「うん。どういいう訳かはさっぱりだけど、何で俺はここに？」

「実はねん、あなたの魂の片割れが別世界に落っこちちゃったみたいなのん？」

「………は？」

何言ってるの……？このパターンは二次創作の小説にありがちな転生的なアレだと思ってるのに。

「あなたの魂魄は分割できちゃう特殊な性質を持っていたらしいのよん。あなたが死んだときに、事故のショックで魂魄が分割されて別な世界に流れていってしまったのん？」

「どんだけ衝撃的な事故だったんだよ。魂が割れるくらいの衝撃っ

て……。」

「見たいン？今のあなたの体ならハンバーグが作れちゃうン？」

想像中……………。

「いえ、いいです……。てかなんで別世界なんか？」

「それはご都合主義ってやつよン、あまり気にしちゃだめン？」

「そういうこと言っちゃだめですよ。」

「それでねン、あなたの方にかまっていたうちにもう片方を見失っちゃったのン。そこで、あなたにお願いがあるのよン？」

「まさか、拾ってこいなんて言わないよね？」

そもそもそんな事やる必要あるの？うつかり落っことして悪さをしているーとかならマズいと思うけど……。

「キヤーツ！大正解よン！あなたには別世界に行ってもらってあなたの片割れを探してもらっわン！？」

「・・・理由を聞かせてもらえる？」

「そうねン。いいわ、教えてあげるン。別世界に落ちた魂魄とあなたの魂魄は完全に同一のもの。あなたが普通に生活していても自然と惹かれあはずよン。今のあなたとはわらわの間にはパスが繋がっているわン。それを通してわらわがあなた達を引っ張りあげるって寸法よン？」

やり方については分かった。が、まだ解消できていない謎がある。俺はさっき思ったことを口に出してみた。

「あの一、幽霊なら別にそのままでもいいんじゃない？どうせ何もできないでしょ。何かしたとしても除霊されて終わり。そうでしょ？」

「そうねン、別に問題はないわン。しいて言うなら面白そうないベントだと思ったからよン？」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「わらわがこの星となり、世界を見守ってしばらく経つけどねン。ここ最近になって思ったことなのよン。わらわにとって星そのものになるっていうのは最終目標だったわン。その後、星になれたの

はいけどその後のことについてはノープランだったの。それまでのゴージャス生活に慣れていたせいか、正直言って退屈だったのね。そんな中、あなたのことを見つけたのよ。自分の片割れを探すため別世界に旅立つ主人公。こんな面白そうなイベントわらわが見逃せるはずないわん？」

「……なんつー理由だ。この人（？）、一応神様ポジション的なとこにいるんじゃないの？自分の娯楽のためにこんなことさせようとするとか……。あれ？もしかして……。」

「まさか……わざと見逃したりしてないよね？」

「……。あなたの片割れはすでに生まれ変わって別な人間として生きているわん。でも、今のあなたは魂魄だから地上では何もできないでしょん。そこで！わらわが用意したスペシャル仕様の肉体を使って転生してもらおうわねん？」

無視ですか。そうですか。確信犯ですか！って、あれ？

「転生？えっと、さっき俺【たち】を引っ張りあげるって……。」

「ちょっと違ってたかしらん。言うなれば【仮】転生ねん。肉体を

レンタルして用が終われば返却してもらうつっていうシステムよん？」

「なんちゅーご都合システム。それを可能にする神様クオリティマジヤベえ。」

「フフン、もっと褒めてもよろしくつてよん？」

「で、その肉体とやらはどこに……？」

周りは真っ白な空間だ。床はあるけど壁と天井がないように見える。すると突然俺の目の前に人間は入っているカプセルが出てきた。

「それがあなたの仮の肉体よん。何から何までがスペシャルな仕様になってるわん。高身長、イケメン、車に轢かれたくらいじゃびくともしない筋肉と骨格、どんな服でも華麗に着こなす、100mは10秒台……。口にしていたらとてもじゃないけど時間が足りないわねん？」

「よくわからんけど……この肉体は超すごいつてこと？」

「さらに！今なら特典として【スーパー寶貝（贗物）7種類】と【空間使いの能力】もプレゼントよん！？」

「無視かい……。で、その【すーぱーぱおぺえ】とか【くうかんつかい】って何？」

「詳しくはジャンプコミックス【封神演義】通常版：23巻 / 完全版：18巻を読んでねん？」

「いやだから……」

「それに関しては肉体の脳に情報をインプットしてあるわん。使い方は実戦で学んでねん？」

「そうかい……。でもスペシャル仕様の肉体に特典まで付くなんて。かなりお高いんでしょう？」

「いえいえん、今だけ特別価格 0円（税込み）でご提供するわん！ただしクーリングオフや不良品交換は受け付けてないのでご注意くださいをん？」

なるほど……。魂の片割れを見つけたのを引き受けたらこの肉体+特典を好きに使っていいと。まあ、まだ【断る】って選択肢もあるけど、ここでその選択肢はないに等しいな。

「どおん？引き受けてくれるん??」

「……まあ、正直別世界とやらの興味あるし。また生きられるなら断る理由なんてないし……。でも魂見つけたらそこで終了なんだよなあ。」

「人間は遅かれ早かれ死ぬ生き物よん。せつかくの二度目の人生なのだから悔いのないようすごしなさいねん？」

「そうだな。んじゃ……………」

この瞬間から、俺の二度目の人生が始まった。

仮転生（後書き）

主人公設定

名前：天海仏樹あまみぶつき

あだ名：フツキ

年齢：20歳という設定（一応作り物なので年はとらない）

身長 体重：平均

宝貝ばおへえって何？

・仙人が用いる道具。仙人の証でもある。使用者のエネルギー（生命力的な）を吸うことで効果を発揮。一般人は持つだけで衰弱死してしまう。

スーパー宝貝説明

本物ではなく贋物。でも、本物に近い力を発揮する。

・雷公鞭らいこうべん 強力な雷を発生させることができる。フルパワー時には超広範囲（大陸レベル）に影響を及ぼす。最強の宝貝。

・太極図たいきよくず 打神鞭「だしんべん」付き 反宝貝。宝貝で発生した事象を鎮めたり、宝貝により受けた傷を癒したり、周りの宝貝を通じて使用者達から力を吸収して自分の力にできる。【打神鞭は大気を操る宝貝。スーパー宝貝じゃないよ。】

・禁鞭きんべん 数キロメートルの範囲を鞭で攻撃できる。精密攻撃は使用者の腕で精度が変わってくる。

・傾世元襖けいせいげんじょう テンプテーション。自分を中心に一定範囲の人間を意のままにあやつれる。かなり高い防御力も持つ。

・金蛟剪きんこうせん 標的を追尾する竜を生み出す。最大で7匹。威力は雷公鞭に続く第2位。1匹に力を集中させることも出来たりする。

・盤古幡ばんこはん 重力を強めることが出来る。重力万倍ってどんだけ。

・六魂幡りくこんはん 伸縮自在のマント（正確な距離は知りません）。包んだ標的を無に帰す。魂も消滅してしまうらしい。

どんな世界？（前書き）

追加説明

能力：空間使い 簡単に言えばどこでもドア。

亜空間をつくりだし、そのなかに滞在できたりもする。（亜空間に自分の部屋とかも作れる）

好きな場所を映し出したりもできる。（出口

を通して見える景色）

どんな世界？

どうもみなさん。私、主人公こと天海仏樹です。

転生初日。現在私はアスファルトの上を匍匐前進中です。実は、とある事情により衰弱状態となっています。まあ、いきなりこんなこと言われても意味がわからないでしょう。まずは回想をどうぞ。

暖かい。太陽の光を感じる。涼しい。風が吹いているの感じる。鳥のさえずりが聞こえる。どうやら無事仮転生できたようだ。目を開けて体を起こす。ここは・・・公園？

「ん・・・・・・・・。ここはどこだろうか・・・・・・・・。」

見た感じはどこにでもありそうな普通の公園だ。生前と似たような世界だな。車が空を飛んでいたり、自然がまったく未来都市つてわけでもなさそうだ。てか俺の格好、なんでジャージなんだよ。神様、もつといい服を選んでくれてもよかったんじゃないの？ そんなことを思いながら辺りを見渡していると、道路の向こう側にコンビニが見えた。

「まずは、情報収集だな。世界情勢とか、この街はどこにあるのか、てか言葉は通じるのか？」

数分後

どうやらここは日本らしい。生前にいた日本とは多少異なる所はあったけど、ほぼ生前にいた日本と変わらない。んで、この街の名前は「海鳴市」。海と山に面した街だが、ただ自然あふれる街と言っわけでもなくそれなりに発展しているようだ。・・・あれ？俺はこの街の名前を聞いたことがある。・・・いやいや、ちょっと落ち着こうか。同じ名前の地名なんていくらかもある。うん、そうだよ。ただ偶然同じだったってだけだ。さて、コンビニの時計はそろそろ正午だ。昼飯でも買ってゆつくりと状況整理＆今後の方針について考……………。

「……………あれ？」

俺はポケットに手を当ててみる。ポケットに手をつ突っ込んでみる。上着のポケットにも同様の事をする。……………。

「もしかして……………金……………持ってない……………？」

まさかの無一文。二次小説なら神様のチートでバカげた金額が入ったクレジットカードやら銀行の通帳やらが見つかるはずなんだが……………。あれ、ちょっと待て……………。

15

「俺、どこで暮らせばいいわけ……………？」

ホームレス転生者、爆誕……………ってふざけている場合じゃない。本格的にやばい。このままじゃ警察のお世話になる可能性もでてきた（住所不定、無職、住民票登録なしetc……………）。それは物語の主人公としては絶対にあってはならない……………！

「！！　そうだった、今こそ授けられた能力を使うときだ！」

そう、神様から授けられた特殊能力『空間使い』！

コンビニから出ると、裏手の細い路地に入った。そして、手を前方に掲げ念じる。

念じた直後、目の前に長方形の大きな鏡のようなものが現れた。鏡の中に手を突っ込んでみる。特に違和感を感じられない。次に頭を突っ込んでみる。中は真つ暗な空間が広がっていた。脳内情報によれば、この中は自分の好きなように出来る空間らしい。ために生前住んでいたアパートをイメージしてみる。ザザッと砂嵐のようなものが出たと思ったら一瞬で真つ暗な空間はイメージ通りの部屋へと変わっていた。

「すっげえ。本当に何でもありじゃないか。」

中に入って入り口を消す。畳の感触も、ベッドのさわり心地も、壁の色も、何もかもが生前使っていた部屋と同じになっていた。さすがに電化製品は動いていないな。まあ、住む場所が出来ただけでもよしとしよう。俺はベッドに座り、改めて脳内の情報を確認する。

「ここが好きに使える自分コーナーだつてのは分かった。あとは遠距離移動と鏡を通して遠くの景色を見ることが出来るんだっけ？この二つを使えるようになるには能力の効果範囲を広げる必要があるのか。やり方はつと・・・」

どうもこの能力はいきなりどこでもいけるといわけではないらしい。時間をかけて自分のナワバリを広げ、そのナワバリの範囲内でのみ『空間使い』の能力が発動するようだ。

「ん・・・。とりあえず海鳴市とその近辺はもう俺のナワバリだ。さて、このまま移動と映像のほうを試してみたところだが・・・」

今の俺に与えられているのは『空間使い』の能力だけじゃない。『スーパ―寶貝』という夢の7つ道具も与えられている。

「個人的にはこっちのほうに興味があるんだよね！普通なら絶対拝めないものだし！しかも自分だけが使えるとか、もうこれ今すぐ触るしかないじゃん！！」

と、いうわけで。雷公鞭の力が発動する前に体のほうがつぶれてしまったのですよ。そこから慌てて出口を作りなんとか外に出たはいものの、中々人に出くわさない。マジでやばい。やばいやばい・・。
。。あ、もう・・。だめだ・・。これ。景・・。色・・。が暗・・。
く・・。。

(・・・んっ。暖かい。この感触・・・布団・・・？俺・・・助かったのか？確か、知らない道で気を失ったはず・・・。)

俺が目を覚ましたときは、すでに日が暮れていた。慌てて体を起こし状況を確認しようとしたが、まだ影響が残っているせいかわまく体が動かせない。

「ひゃっ!？」

横から驚いたような声が聞こえた。声のするほうを見ると

「あ・・・あの・・・だ、大丈夫・・・です・・・か？」

短いサイドテールの小さい女の子がいた。

どんな世界？（後書き）

本物の宝貝は持っているだけで生命力を吸われます。使ったときのみ生命力を吸われるというのは贗物の仕様です。

高町家の一族

「あ……あの……だ、大丈夫……です……か？」

振り向いた目の前には短いサイドテールの小さな女の子がいた。まさか……この子が今まで看病をしてくれていたのか？女の子は小走りですぐ部屋から出て行った。一人になり、改めて周りを見つめてみる。どうやらここは客間のようだ。

少しして若い女性がおぼんをもって入ってきた。おそらく姉だろう。

「ご気分はいかがですか？これ、軽食ですがどうぞ。」

おぼんには消化によさそうな料理が3品ほどのっていた。助かる。寝て少しは回復したけど、それだけじゃまだ足りていないみたいだからね。

「ありがとうございます。いただきます。」

食事を終ると、空になった食器をもつてお姉さんは部屋を出て行った。どうやらこの世界は義理と人情あふれる世界のようなようだ。でなければこんな見ず知らずの人間を保護したりなんかしないだろ。特にやることもないので再び寝転び、回復に専念することにした。人ん家を勝手に歩き回るつてもできないし。あ、一応何か聞かれたときの言い訳考えておこう。うーん……。しばらくして、数人が部屋に入ってきた。

「やあ、気分はどうかな？」

若い男性が話しかけてきた。この人はお兄さんだろう。その後ろにいるのは……弟かな？もう一人は……多分さっきの人の妹だろう。さっきの人と比べてちょっと幼さがある。

「はい、おかげさまでよくなりました。本当にありがとうございます。休ませてもらっただけでなく、食事までいただいて。」

「いやいや、気にすることはないよ。君が倒れていたのはうちの近くだったしね。あのまま放っておくのはさすがにマズイと思ったんだ。」

この世界はホントいい世界だ。若者が自立的に人助けをするなんて。何故俺のいた日本はこうならなかったのだろうか。

「マズイというのは自覚できていたんですが、なかなか体が思い通りに動かなくて……。後日お礼の品を持って訪問させていただきますね。ぜひ両親の方々にもお礼を言わせてください。」

「え？」

ん？俺なんか変なこと言ったかな？一応ちゃんとお礼はしないといけないと思ったんだけど……。

後ろの二人は何故苦笑いをしているんだ……？

「ハハハ……。自己紹介がまだだったね。私は『高町 士郎』。後ろの二人は【息子】の『高町 恭也』と【娘】の『高町 美由希』だ。」

後ろの二人が軽く会釈をする。

.....
.....?

え？息子？娘？あれ、それおかしくね？え？だってこの人どう見ても二十代……。
しばらく談笑していると、さっき食事をもってきてくれたお姉さんと一番最初に見た少女が部屋に入ってきた。

「あなた。どうです？彼の調子は。」

「あ、ああ。だいぶよくなったみたいだよ。顔色もいいみたいだし。」

……。。この人はお父さんなんだよな？その人と名前で呼び合う仲。つまり……。。

「あの……、失礼ですがそちらの方は……？」

「あ、すみません。私は『高町 桃子』といいます。この子は【娘】のなのはです。」

……。。えーと、つまり……。。

体調もよくなったので、高町家から出ることにした。「もう夜だし、今日はゆっくりしていけば？」といわれたが、こつちにも都合があるみたいなことを言っつてやんわりと断った。見られないところに入り口を作り空間部屋へと戻る。

あの二人の若さにも驚いたが、今驚いているところはそこじゃあない。

自己紹介のとき、しれっと出てきた言葉。

<<あ、すみません。私は『高町 桃子』といいます。この子は【娘】のなのはです。>>

街の名前が『海鳴市』。性が『高町』。名が『なのは』。これが意味することはただ一つ。

この世界は義理と人情あふれる世界じゃあない

剣と魔法のバトルファンタジー世界だ。

太極図、使用不能

前回の最後にてとんでもないことが発覚した。

俺が転生したこの世界。実は生前に見たことがある。もしかしたら違うかもって思ったけど、土郎さんとの会話で長男が大学生という情報は聞いている。だから多分間違いない。

『魔法少女リリカルなのは』

これは番組のタイトルだ。しかもアニメ。まさか隠れヲタだったこの知識がこんなところで役に立とうとは……。

物語は、えーと……小学三年？四年？くらいの『少女』が『魔王』と呼ばれるようになるまでの軌跡を描いた物語だったはずだ。あれ、ちよつと違うような気がするけど……。何せ最後に見たのは五年以上も前だしな。まだ魔法少女になってないってことは、これから無印編が始まるって事だろ。たしか無印編は

- ・スライム襲来
- ・神社でわんこが襲撃
- ・街にでっかい木がはえた
- ・巨大ねこ
- ・温泉でどばーん
- ・街爆散、素手封印
- ・人面樹襲来
- ・管理局と協力関係
- ・海で竜巻
- ・ラストバトル
- ・クローン暴露

- ・突撃
- ・最終回

すっごい大雑把だけど、たしかこんな感じの流れだったよな。ちょっと自信ないけど。神様め、この世界が物騒だつてことを知ってたからスーパ―寶貝なんて持たせたんだな。

・・・ん？つーことは、俺もこの物語に介入しないとイケない？チートパワーを惜しみなく使つてハッピーエンドを目指したり、「俺は平和主義だから戦わないぜ！」とか言つておきながらなんかんやで巻き込まれちゃったり、周りのヒロイン達に優しくしてフラグをバンバン立てちゃったり、アンチ管理局目指して敵を見方につけちゃったり。道はいくらでもあるな。

俺個人としてはこの物語には積極的に介入したい。だつてスーパ―寶貝を存分に使いたいもの。

でも、原作がいつ始まるのかがまだよくわからない。ま、動くのはある程度後からでもいいや。まずはスーパ―寶貝を使いこなせるようになるほうが先だ。

というわけで、前に作った練習用の部屋へと移動する。今日使うのは『太極図』。これにはスーパ―寶貝より生命力の消費が少ない通常の寶貝『打神鞭』も付いている。打神鞭は大気を操る寶貝だ。今の俺でもある程度は使いこなせた。風の刃を飛ばしたり、竜巻を起こしたり、突風を吹かせたり、小さな火種を炎にすることだつてできる。

太極図は反寶貝^{アンチバオヘエ}。通常の寶貝は所有者の力を吸つて奇跡を起こすが、太極図は他の寶貝から力を吸い取つて自分の力にする。その力はさまざま、パンチ一発が雷公鞭の一撃と同等の威力、どれだけ肉体が吹き飛ばすと細胞がほんの少しでも残っていれば自動で復元、おまけに髪が淡い水色になったりする。集めた力を自分以外に使用す

ることでも可能で、宝貝で引き起こされた事象を鎮めたり、宝貝によって受けた傷も癒してくれる。もうこれ最強だね。なんとしても使いこなせるようになりたい。

「よし、まずは宝貝の力で出来た傷を癒す能力から……………」

……………この時まで全然疑問に思っていなかった自分の馬鹿さ加減に絶望した。この世界の主流武器は『デバイス』だ。

「これから始まる物語の中に……………宝貝なんてでてきたっけ……………」

何故気づかなかった。一応第三期までは見たが、【ぱおぺえ】なんて単語はどこにもでてこなかった。

「もしかして……………これ……………」

ファイナルウエポン、終了のお知らせ。

・・・マジか。・・・マジでか。本当にこれで終わり？脳内情報に<太極図は魔力にも有効です。>なんてなかったし・・・いやいや、もしかしたら奇跡が起きて魔力に対しても太極図の力が有効になったり・・・。

魔力に対して有効・・・？

「そうだよ！有効じゃないなら有効にすればいいんだよ！アンチマジリンクフィールドや戦闘機人なんて技術もあるんだよ！？カートリッジシステムみたく、後付で太極図の陣に魔法言語を追加したり、もしくは、太極図の力を魔力用に変換する何かを作ればいいんじゃないか！」

多分出来るよ！俺主人公だし、肉体はスペシャル仕様だから多分頭もいいだろうし。あ、でも魔法関係の知識はどうがんばっても独学

じや無理だ。どうせ物語には介入する予定だったし、ちょうどいいや。

とりあえず、クロノが登場するところには何としても介入する必要があるな。管理局とのつながりができる。

ここで何とかして魔法の勉強をさせてほしいと頼もう。もしかしたら管理局に入ることになったりするかも……。束縛されて自由がなくなるのは嫌だな。ジュエルシードをダシにして交渉を持ちかけてみるっての一手だ。

『魔法について詳しく勉強させてください！管理局には入らないけど！そしたらジュエルシードやるよ！』

・・・ちよつと虫が良すぎるかな？まあ、何かしらの方法を考えておしじ。

この時点で、主人公は太極図のことで頭がいっぱいになり『自分の魂の片割れを探す』という目的をすっかり忘れてしまっています。

次の日。

昼過ぎ、俺は高町家を訪れた。先日助けてもらったお礼をするために。年中無休の翠屋は今日も定時開店だ。

「こんにちはー。」

「いらっしゃ・・・おや、君は昨日の。」

店に入った俺を土郎さんが出迎えた。平日なのに客がなかなか入っている。さすがは人気店だ。

「さっそく来てくれたのか。店で食べていくかい？それとも持ち帰

り？」

どうみても二十代だよなあ……。これで三人の子供がいるなんて信じられん。

「あ、いえ。違うんです。実は助けにいただいたお礼がしたくて……」

「ああ、そのことか。別に気にしなくてもいいよ。困ったときはお互い様だ。人は互いに助け合って生きていくのが普通なんだからさ。」

イケメンでやさしいのね、嫌いじゃないわ！でも、それじゃあこっちの気がすまないんだ。

「いえいえ、それじゃあこっちの気がすみません。まあ見ていてくださいよ。」

「……？何を始める気だい？」

士郎さんが不思議そうな顔をしている。俺はあらかじめ持ってきた薪を取り出し見せた。

「これから、この薪を使って『炎占い』をします!」

「はあ……う、占いねえ……。」

ちよつと困るなあって顔してますね。その表情、驚きに変えて見せましよう。

「あかさ……ここ店内だし、他のお客様の迷惑になるから……。」

「ここでもいいんです。他の客にもみてもらわないと意味がないんですよ。」

他の客たちがいつの間にか俺のほうへ視線を寄せていた。占いという単語に引っかかったのだろうか。所々から「占い?」「占いだつて!」と言う声が聞こえる。準備はばっちりだ。もう片方の手に打神鞭を握る。

「そういうのはまた今度にしてもらえないかな？今はまだ営業中・・・」

「まきー、まきー、教えたまえー。」（カン！カン！カン！）

俺は土郎さんの言葉を遮り、勝手に占いを始める。左手に持った薪の先を、右手の打神鞭で叩く。すると、突然薪の先に火がついた。着いた炎をまじまじと眺め、カウンターにいる桃子さんに質問した。

「桃子さん。今日の夕食の買出しはまだですよね？」

「え！？え、ええと、そうね。たしか材料が足りなかったから買いに行く予定よ。」

桃子さんは慌てながらもちゃんと答えてくれた。次に、目の前にいる土郎を見る。

「土郎さん、今から買出しに向かってください。帰り道、最初の信号を通り過ぎた後に見えるバス停に、道に迷ったおばあさんがいます。そのおばあさんが米と肉と酒をくれるでしょう。」

「いや、そんな急に言われても……。」

「あら、いいじゃない。ちょっと面白そうだね。買ってくる食材のメモ渡すからちょっと待ってて。」

士郎さんは嫌な顔をしているが、桃子さんはけっこうノリノリなようだ。周りからも「えー、ホントー?」、「当たったら私も占ってもらおうと!」といった言葉が聞こえる。

「あ、ちゃんと店の入り口から入ってきてくださいね?ここにいますみなさんにも見てもらわないといけないので。」

太極図、使用不能（後書き）

原作でも、太上老君が持っていた太極図を太公望用にカスタマイズしていた描写があっただので魔力用にカスタマイズとかもできちゃったりしちゃうんじゃないかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681y/>

デバイスと宝贝（パオペエ）と自分探し

2011年11月26日00時04分発行